

(様式1)

教育研究業績書

2024年5月1日

氏名 霜山薫

研究分野

学位

看護学

修士(看護学)

研究内容のキーワード

地域看護学

職務上の実績に関する事項

1. 資格、免許等

保健師/看護師/第一種衛生管理者/養護教諭二種免許

2. 所属学会

日本農村医学会/日本看護科学学会/日本地域看護学会

(様式2)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単・共の別	発行又は発表年月日	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(学術論文) 特定健康診査・特定保健指導の評価に関する研究 一判定結果の推移一	単著	2012年3月	埼玉県立大学大学院 修士論文	特定健康診査・特定保健指導の評価を目的に特定健康診査3年連続受診者3,943名の判定結果を調べた。各年度のメタボリックシンドローム判定および予備群は、同じ判定に留まる者が多く、積極的支援から保健指導対象者への推移は60%、動機付け支援から保健指導対象者への推移は60%であった。また、メタボリックシンドローム非該当者が翌年も非該当者である割合は90%を超えておりメタボリックシンドローム該当者、積極的支援対象者は次年度も同じ判定に留まる可能性が高かった。
(学会発表、講演など) 1. 地域で生活する成人期の知的障がい者の健康状態に影響を与える要因	共著	2009年10月	第68回日本公衆衛生学会総会	地域で生活する成人期の知的障がい者の健康状態に影響を与える要因について知的障害者施設職員に面接し結果をまとめた。障害者の健康状態に影響を与える要素には障害者自身に関わる者として<自己流の生活><身につけていない生活習慣><動こうとする気持ちの少なさ、動く気持ちに少なさ><体調変化に気づかない、体調変化を上手く伝えることが苦手><コントロールの難しい慢性疾患と肥満の問題><障害者とこれまでの関係>の6つのカテゴリーが抽出された。 共著者:大越扶貴, 田中敦子, 霜山薫
2. 特定健康診査未受診理由の検討	共著	2012年3月	第13回埼玉県健康福祉研究発表会	未受診理由および受診要件を明らかにして、受診率向上に寄与することを目的として過去2年間未受診であった者6,319人に調査を行った。3,467件を分析対象とし未受診理由を選択肢から選んだ結果、23年度受診群では健康面に不安がないからが27.0%と最も多く、次いで通院中、仕事や家事で忙しかったかと続いている。未受診群では通院中が50.3%と5割以上を占めていた。健康については両群とも80%以上が心がけていることがあると回答した。 共著者:中崎啓子, 霜山薫, 蛭名正彦, 田辺奈緒子, 山田玲, 進藤 薫, 原口久美子, 高橋玲子, 加藤一二三
3. 特定健康診査における内臓脂肪症候群判定結果の推移	共著	2012年10月	第71回日本公衆衛生学会総会	3年連続受診者の内臓脂肪症候群判定の推移を検討した。判定結果の割合と推移率を調べた。その結果、男性の内臓脂肪症候群の該当者率は女性よりも高く内臓脂肪症候群該当者は年齢階級が高くなるにつれて増加していた。内臓脂肪症候群の判定は次年度の結果から同じ判定にとどまる割合は高かった。 共著者:堀越薫, 中崎啓子

4. 看護学生の高齢者へのイメージと世代間交流に対する意識についての一考察	共著	2013年8月	日本看護学教育学会第23回 学術集会	高齢者へのイメージと世代間交流に対する看護学生の意識についての現状を明らかにすることを目的に質問紙調査を実施した。その結果、高齢者に対する肯定的なイメージを持つ傾向にあることが示唆されたが世代間交流については必要性を感じても実際には消極的な傾向も認められ、教育上補う必要性が示唆された。 共著者:高木悦子,堀越薫,神庭純子
5. 地域住民と協働した防災キャンプによる看護学生の学び	共著	2015年8月	日本看護学教育学会第25回 学術集会	地域住民と協働した防災訓練に参加した看護学生の学びを明らかにすることを目的にグループインタビューを実施した。学生は避難所で起こりうる健康障害や災害急性期における看護職の役割等に関して理解を深めていた。 共著者:尾崎美恵子,齊藤美恵,高木悦子,堀越薫
6. 在宅における終末期療養者家族へのケア	共著	2018年9月	第25回日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会	家族も第二の家族と言われており看護学テキストでは、家族へのケアについてどのように記されているのか調べた。全テキストに「傾聴」「症状コントロール」「グリーフケア」多くが「終末期各期の家族ケア」「エンゼルケア」であった。学内での教授方法を検討する必要がある。 共著者:堀越薫,藤田文子
7. 在宅看護論テキストにみる終末期のケア	単著	2018年12月	日本人間関係学会第26回大会	学生時代に学ぶ機会の少ない終末期のケアについて、初学者が初めて出会う看護学テキストにどのように記載されているかを明らかにした。在宅看護論で用いられる最新テキストから終末期のケアを抽出し検討した。全テキストに記載されていた項目は「症状コントロール」、「グリーフケア」であり、次に「看取り」、「在宅療養の条件」、「チームケア」が挙げられた。現状では学生が経験しにくい環境をふまえ、教育内容、教育方法を検討する必要がある。
8. 地域で生活する統合失調症をもつ人の対人関係の構築に関する支援の文献検討と今後の課題	共著	2022年8月	日本地域看護学会第25回学術集会	地域で生活する統合失調症の対人関係構築に関する支援について文献検討を行い今後の課題を明らかにした。本人の主体性の発揮と自己決定を尊重し促進する、本人と周囲の橋渡しから他者の力の活用することがあげられた。 共著者:中村郁美,堀越薫
9. メンタルヘルスケアにおける看護実践に関する文献検討	共著	2022年12月	日本看護科学学会第42回学術集会	看護職のメンタルヘルスケア実践について支援内容をまとめ課題を明らかにした。復職支援、メンタルヘルス支援システムを構築する活動の内容が明らかになったが、看護の効果・評価について解明されることがのぞまれる。 共著者:堀越薫,中村郁美
10. 地域の困難事例に対する支援内容についての文献検討	共著	2023年12月	日本看護科学学会第43回学術集会	地域包括支援センターにおける困難事例について専門職の支援内容について明らかにした。6件の文献から困難事例の背景は、認知症高齢者、高齢精神障害、セルフ・ネグレクト、高齢者虐待、それらを総称したものであった。支援内容は本人・家族、近隣・周辺への支援と専門職の地域特有の支援に分けられた。今後は専門職の取組みの帰結や影響について明らかにする必要があると考えられた。 共著者:霜山薫,中村郁美
11. 精神科訪問看護師が利用者との信頼関係構築に向けて行った支援に関する文献検討	共著	2023年12月	日本看護科学学会第43回学術集会	精神科訪問看護師が利用者との信頼関係の構築に向けて行った支援について文献検討を行った。支援の内容が記載されている7件の文献を分析対象とした。支援は5カテゴリ、非言語的コミュニケーション技術、観察する支援、判断する支援、伝える支援、尊重する支援であった。利用者が考える精神科訪問看護師に対する信頼とはどのようなものなのかは明らかにされていなかった。 共著者:中村郁美,霜山薫
(その他) 1. 地域における成人期の知的障がい者の健康に影響を与える要素とその対応のあり方	共著	2009年10月	フランスベッド・メディカルホームケア研究・助成財団 平成20年度(第19回)研究助成・事業助成報告書	知的障がい者の健康管理や一般医療上の課題や支援のあり方を示し、知的障がい者の今後の支援を考える上での基礎資料を提供することを目的に施設職員に半構造化面接を行った。結果として健康状態に影響する要素は本人によるものと家族の関係に関わるものがあつた。今後、施設から在宅への移行がすすむにあたり、健診・検診や一般医療において障がい者は当たり前の医療が受けられないという現状が明らかになった。 共著者:大越扶貴,田中敦子,霜山薫

<p>2. 平成22年度 生活習慣病予防事業 報告書 桶川市</p>	<p>共著</p>	<p>2011年3月</p>	<p>埼玉県国民健康保険団体連合会</p>	<p>未受診者調査からは、受診者と未受診者を分ける要因は明らかにならず、受診群、未受診群とも自分自身、家族の健康への関心は高く健康的な生活習慣を心がけていた。受診率向上には、医療機関通院中の者の算定方法を検討することが効果的ではあるが、特定健診の本来の意味を考えるならば地道に個々に健診の重要性を伝えることも必要である。 共著者：中崎啓子, 霜山薫, 田辺奈緒子, 高橋玲子, 加藤一二三</p>
--	-----------	----------------	-----------------------	--